

# 商学部の英語と三人の英作文家

伊 東 克 巳

## I

### 明治期の教育と英語

このたび商学部の歴史が編纂されるにあたって、商学部における英語教育の回顧をせよ、ということであった。もとより筆者は歴史が専門ではないので、あまり仰々しいタイトルをここにかかげるのは内心忸怩たるものがあるけれども、商学部の伝統的な英語教育の草創時代を顧みるには、やはりその時代的な背景を一瞥しておく必要があろう。

時代は更にさかのぼる。早稲田商学第234・5号所載の入交教授の「早稲田大学商科設立の経緯と早稲田実業学校の存在」の冒頭には明治維新の「変革によって成立した明治政府は……真剣に『文明開化政策』と『殖産興業政策』とを強行したのであった」と述べている。そして明治5年(1872)の「学制頒布」は「国民皆学制を取り、第二に学問教育の目的を『身を立るの財本』『其産を治め、其の業を昌にする』に置き……第三に学問・教育が人民の自主自発により行わるべきを定め』たとある。そして、明治「政府があえて『実用の学』の必要を強調した所以は、国家の富強が、一般人民の才芸の進長にもとづく」と認識していたからである」と遠山茂樹氏の言葉を引用している。このような実学は欧米先進国より招へいされた所謂「お雇い」の教師の人々や、海外留学を終えて帰朝した日本人によって伝え、ひろめられたのであった。なかでも、アメリカから招かれた W. S. クラークによる札幌農学校(明治9年)、W. C. ホイトニーによる商法講習所の開設(明治8年)や東京大学の開設(明治10年)等は、

やがて直接、間接に、制度的に、人的に、二十数年を経て早稲田大学商科の開設につながるのである。開成学校時代を含めて東京大学における外人教師として注目されるのはフルベッキ、後に札幌農学校に移ったサマーズ、ホートン、フェノロサ、ハウス、モースなどである（高田早苗、坪内逍遙は、東京大学においてホートン等の門下生であり、早稲田大学商科に招かれて英語を教えた武信由太郎は札幌においてサマーズの教えを受けた）。

この時代における（明治10年前後）外国語（即英語）教育は他の人文、社会、理工諸科学と未分化の状態であり、外国人である教師の講義を聞くには外国語（英語）の知識が不可欠であった。また諸学科も未分化のようで、東京大学でも「当時の文学部にはまだ文学専攻はなく、経済学部というべきであった」<sup>(1)</sup>し、札幌農学校の著名な出身者の経歴を見ても（新渡戸稲造、内村鑑三、武信由太郎、頭本元貞、志賀重昂, etc.），当局者の意図はともかく、学生の方は漢学的な把握の仕方であって英学一般を学んだものであろう。何を学ぶにしても、「その志すところは治国平天下の政治にあった」<sup>(2)</sup>のである。

東京商法講習所の諸講義も6ヶ月程度の英語基礎教育の後に英語教課書を用いて行なわれたものであるが、とくに語学教育面で「一、英文習字 一、同作文 一、同会話……一、訳文（和英訳、英和訳） 一、電信暗号 一、英語商用文章」が明治12年の同所規則、科目課程の説明中に見えることに注目しよう。何を学ぶにも英語を通して勉強しなければならなかった時代に、特にこれらの科目が置かれたのは、一つには東京商法講習所の範となったアメリカの Chain of Commercial College にそのような科目があったからでもあろうが、<sup>(3)</sup>一つには新たに開国して盛んになって来た通商貿易における後進国としてのハンディキャップをなんとか打破したいという世論と、商業教育に対する期待とを表わしたものだ。商法講習所の設立趣意書のなかで福沢諭吉は次のように述べている。「或は開港場に於て外国人と商売を取組み、一時に勝利を得て数万の富を致するものあらんと雖、其実は外国人と戦て勝ちたるにはあらず。他の日本商人が拙劣なるか為に意外の僥倖を得たりと曰ふに過ぎざるのみ。外国と戦ひたるに非らず。内国の同士打ちなり……然るに今の日本の商人

は外国の品物を買ふに其の来る処を知らず。自国の物を売るに其の行く処を知らず。横浜神戸に在留する外国人を仰て其取次を頼むに非ずや。開港場の外国人は問屋に非ず。亦製造家に非ず。正銘の仲買なり。此仲買共を開港場より打払ふに非されは日本の商売は逆も盛大の見込あるへからず。其理甚だ明なりと雖、方今の景況にては却て此仲買の為に窘められ、既に主客を異にする程の勢にてロンドン・パリスの問屋へ直談などの話は前途尚遙かなり。況んや今の学問の有様にては外国人と交通も不自由なり。』<sup>(4)</sup>もちろん「外国人と交通」というのは外国人と *Communication* を行なうと言う意味である。

注(1) 『日本の英学100年』明治編(研究社刊1968年) p. 31. 『早稲田大学80年誌』にも「彼ら(坪内雄蔵、高田早苗)が在学したころの東大文学部は、政治、経済が主で……」(p. 78)とある。

(2) *ibid.*, p. 26.

(3) 猪谷善一「ベルギー、アンヴェルス商科大学と日本」早稲田商学241号。pp. 14～19.

(4) 入交好脩『『早稲田大学商科』の設立の経緯と『早稲田実業学校』の存在』早稲田商学234・5号、昭和48年。

## Ⅱ

### 商学部の英語

東京専門学校が早稲田大学と改称するのは明治35年(1902)のことであるが、明治初年からここに至る間の高等教育の変遷は、見方によっては、未分化から分化への過程だと言って良からう。そのさきがけを為したのは東京専門学校である。即ち、東京専門学校においては、その創立(明治15年)にあたり、英語と諸学との分離が行なわれるのである。「本校がかざした旗印は、『邦語をもって高等専門の学問を授ける』ことにあり、大隈が学問の独立はここにあるとしたものである。その頃の学界を代表する東京大学では、凡ての学科を英書について講義し、日本人の教授もまた、英語で話をした。他に独逸語をも課したから、日本語は第二外国語のようにも考えられた。大隈はこの欧米心酔を遺憾とし、学問の自主性を確立する方法として『邦語による』学習法をとった。』<sup>(1)</sup>の

である。これは本来英学者であった福沢諭吉の慶応義塾が「英語英文ノ練修ヲ力メ主トシテ英書ニ依リ普通及専文<sup>(マナ)</sup>ノ学科ヲ授クル処」<sup>(2)</sup>として出発したのとは対照的である。一方においては、明治6年「学制」に追加された文部省布達第57号が「外国教師ニテ教授スル高尚ナル学校之ヲ汎称シテ専門学校ト云フ但…其學術ヲ得シモノハ後來我邦語ヲ以テ我邦人ニ教授スル目的ノモノトス」<sup>(3)</sup>と規定したのに対して、明治12年の「教育令」が「専門学校ハ専門一科ノ學術ヲ授クル所トス」<sup>(4)</sup>となったのによっても英語が諸学と分離されて行く道程が分る。

しかし、新しい学問体系は、当然欧米の新知識の摂取を更に必要としたし、日清戦争を経て、政治経済が国際的な発展を遂げるとともに、英語その他の外国語の実用的な必要性は高まる一方である。このようにして、学問は英語その他の特定語学や特定の外国とは分離した普遍的存在であって、しかも、その開発のためには外国語の知識が是非必要であり、あわせて実用的外国語の習練によって国際社会への適応を行なうという、現在の商学部におけるような外国語教育と諸学問領域との関係に対する認識が成立してくるのである。

これを明治36年の早稲田大学紀要によって見るならば、「文物ノ精粹ハ一ニ泰西ニ採ルモ之ガ講述ハ邦語ニ由リ来学ノ子弟ヲシテ直チニ渊源ニ溯リテ速ニ材能ヲ長ゼシメ……但シ生徒研究ノ用ニ供センガ為メ英語ヲモ兼習セシ」<sup>(5)</sup>めるのであるが、一方において特に「商科大學に於ける英語は専ら実用を旨とし」<sup>(6)</sup>たのである。「実用云々」は明治36年の商科学生募集の要項に記載されたものであるが、それには更に続けて「猶ほ完全を期せんが為、一月より英語談話会なるものを設け、一週三時間宛其の会合を為し……」とあり、現在の早大英語会の草創の姿を伝えている。

さらに、早稲田大学商科が目標とした実用英語教育がどんなものであったのかを知るために、明治34年開校した早稲田実業学校の初代校長天野為之の同校開校式の演説を引用しよう。なぜなら、天野為之は、早稲田商科大學本科の初代科長であり、前後することわずか数年で発足した両校の商業教育の思想は、互いに密接に関連していたというよりも、全く同一であったからだ。すなわち

「……出来得べければ英文学の修養をも希望するけれども、是も、矢張り人生の短かきがためにさう種々精神を散ずると云ふ訳にはいかない、成るべく商売的英語に力を注ぐ、又本校の英語教授は成るべく現在を知るに力を用ゆる、夫の新聞雑誌は現在を知るに付て最も肝要な機関である、故に日本の新聞を読むやうに自由に外国の新聞を読む習慣をつけて置きたいと言ふのが本校の希望である。尤も歴史其他の論文を見るのも必要でありますから、幾分かそれに精神を注ぐのは固よりでありますけれども、そればかりに偏し却つて簡易実用の『イングリッシュ』を忘れることが今日の通弊でありますから、此の学校は其通弊に陥らぬやうに警戒することを考へて居るのであります。』<sup>(7)</sup>」というのである。

かくして明治36年に開設された早稲田商科大学高等予科における英語は、第一期の4ヶ月においては、週28時間の授業のうち16時間、第2期と第3期（それぞれ4ヶ月）においては14時間という重要度を持ち、明治37年に始められた本科の授業においては、第1年級29時間中10時間、第2年級30時間中8時間、第3年級31時間中6時間となった（すべて週授業時間である）。本科の英語は、商業作文、商業英会話、訳解と分れ、マスター・オブ・アーツ アーネスト・ルース、法学士大隈信常、農学士武信由太郎、ドクトル・オブ・フィロソフィー 高杉滝蔵、ジェー・マックグレガー、小林行昌、バチェラー・オブ・アーツ 杉山重義などが担当した。<sup>(8)</sup>

注(1) 『早稲田大学80年誌』 p.52.

(2) 『日本の英学100年』 明治編, p.387.

(3) 市川孝正「商学部史関係資料とその解説 (1)」早稲田商学 234・235号, p.72.

(4) *ibid.*

(5) [資料6] 早稲田大学規則一覧（明治36年）*ibid.*, p.104.

(6) 早稲田大学商科「学生募集」、入交好脩「『早稲田大学商科』設立の経緯と『早稲田実業学校』の存在」早稲田商学 234・235号, p.24.

(7) *ibid.*, p.17.

(8) *ibid.*, pp.22, 23.

## Ⅲ

武信由太郎

なかでも英語の専門家としては武信由太郎が有名である。いま略歴を『日本の英学100年』<sup>(1)</sup>から引用すると：

「武信由太郎（1863—1930）

文久三年因幡の生まれ。明治17年、札幌農学校を卒業。飯田中学校教師、ジャパン・メール記者を経て、明治30年に頭本元貞とともに『ジャパン・タイムズ』を創刊。明治31年に勝俣銓吉郎とともに『英語青年』を創刊、その和文英訳欄を久しく担当した。明治38年、早稲田大学教授。明治44年から大正6年まで東京高師でも英作文を教えた。明治38年、『ジャパン・イヤーブック』を創刊、日本を海外に紹介することに努力した。明治44—大正2年、『英語世界』主幹。著書では『武信和英大辞典』（大正7年）が広く用いられた。昭和5年病没。」

武信由太郎は、日本における英文学研究の祖で、初めてシェークスピアを講じた英人ジェームズ・サマーズの薫陶を札幌農学校において受けたのである。農学校は予備科（3年制）1年度で週18時間の、本科（4年制）でも週2～6時間の英語又は英文学が課せられ、4年では「臨機英語討論」や「英語演説」の科目があり、「毎日の教科はもちろん討論にも英語を用い、学校へ出す支給品の請求書まで英語を用いた」<sup>(2)</sup> そうだ。農学士である武信由太郎その他の人々がこの新来の異国の言葉とその背景をなす文化や思考様式に絶大な魅力を感じ、単に農学の分野にとどまらず、より普遍的な啓蒙者、すなわち思想家、教育者、ジャーナリストあるいは語学者として日欧文化の接点に身を置こうという使命感を持ったのは当然とも言えよう。

武信由太郎が英文ジャーナリストとしての修業を積んだのは、横浜で発行されていた F. Brinkley の経営する有力紙『ジャパン・メール』であった。『ジャパン・タイムズ』は、慶応元年（1865）に同名のものが横浜に C. Rickerby の手によって創刊されているが、現在の『ジャパン・タイムズ』は、これとは

全く関係なく、明治30年3月「伊藤博文内閣の渉外秘書であった頭本元貞（武信とともに札幌農学校に学んだ）が公の支援を得、多年の宿望を達して発行した日刊英字新聞である。」<sup>(3)</sup>頭本は主筆、武信は副主筆で、社長山田季治の下で、頭本の論文、武信の叙事文は評判高いものだったという。同紙は、伊藤公の命により、欧州を視察した頭本が、「日本の現状に対する世界の認識不足」を是正し、英文によって「日本の声を世界に訴える」<sup>(4)</sup>ために、純日本人の手によって発行された初めての英字紙であった。

現在、英語・英文学関係の研究雑誌として権威を誇る『英語青年』は、上記のような『ジャパン・タイムズ』の目標を、いわば裏がえしにして、「国内においても英学生に時事知識を注入、彼らの英語力を増進せしめようと念願して、武信の発案によって」<sup>(5)</sup>はじめ『青年』後に『英語青年』と改題して明治31年4月に発行されたものである（英語名はともに *The Rising Generation*）。編集は勝俣銓吉郎によって行なわれた。

早稲田の商科が第1回の始業式を行なったのは明治37年9月で、「早稲田大学第23回報告」<sup>(6)</sup>によると、前述のように、「商業文（英文）」の担当者は、明治37、8年において「農学士武信由太郎」その他である。しかし、武信は『日本の英学100年』の略歴に言うように38年になってから早稲田に来たものであろう。『英語青年』昭和34年12月号の勝俣銓吉郎先生略伝（上井磯吉）には「武信（由太郎）さん（明治37年9月早大商学部新設開校と同時に教授となっていた）」とあるが、後に述べるように、伊地知純正は明治38年4月に武信が早稲田に来たという意味のことを言っている。

かくして武信は、以後没年に至るまで26年にわたって早稲田大学商学部で商用英文を教えたのである。どのような因縁で早稲田に来るようになったかは、必ずしも明らかではないようだ。『日本の英学100年』の年表によれば明治38年の項に「この年、武信由太郎ジャパン・タイムズ社を辞し、早稲田大学教授となり、*Japan Year Book* を創刊。」とあって、何月のことか不明である。

*Japan Year Book* は、『ジャパン・タイムズ』と同じ目標のもとに明治38年から刊行された英文年鑑であるが、武信が没したのが昭和5年で、その年に最

終号を出して終った。これは700頁に及ぶ日本に関する百科辞典であった。

前記略歴によると、明治44年から大正2年まで『英語世界』の主幹であった、とあるが、同じ『日本の英学100年』の年表と大正編<sup>(7)</sup>によれば、『英語世界』(The English World)は明治40年の創刊である。博文館の発行で、主幹武信、編集主任長井氏最であった。旧制中学程度のこの雑誌は好成績であったが、大正2年に「故あって(長井)氏は編集長の席から去った」<sup>(8)</sup>とあるから、武信も同時に主幹を辞したものであろう。その後大正7年に廃刊になっている。

『ジャパン・タイムズ』と、『ジャパン・イヤーブック』の創刊によって、世界に対して日本の紹介を試みた武信は、内にむかっては『英語青年』(上級)と『英語世界』(中級)の創刊によって、日本の青年の眼を開こうとした。ここに明治初期の開化の時代に札幌農学校に学んだ啓蒙家の自負と面目が躍如としている。商学部的に言えば、彼の活動と彼の提供しようとした製品ラインとは、ついに、和英辞典の出版によって完成する。われわれは、彼の辞書が英和でなく和英辞書であることに注目しなければならない。『ジャパン・タイムズ』、『ジャパン・イヤーブック』『和英大辞典』と見てくれば武信の意図がどこにあったかは明らかである。正しい日本の姿を世界に紹介すること、日本の主張を世界に理解させることがこの啓蒙家の畢生の事業であったのである。また後世が彼の事業を受けつぎ、世界の中に日本が地歩を勝ち取ることが出来るような国際コミュニケーションの能力を備えることを切に希望したからこそ“The Rising Generation”(英語青年)や『英語世界』を創刊し、早稲田に教鞭を取ったのである。武信由太郎の仕事にはその意味で一貫性があり、理想がある。それが武信を単なる英語の専門家や先生に終らせていないのである。そこにわれわれは維新を受け継いだ、明治の人を見るのである。

『武信和英大辞典』大正7年研究社から刊行された。町田俊昭氏の辞書発達史的な分類によると、<sup>(9)</sup> 和英辞書として第3期、すなわち「現代的な和英辞典の行なわれている時期」の先頭に位置するもので、3年遅れて大正10年に刊行された『井上和英大辞典』(町田氏の分類によれば第2期的なもの)よりも近代性を備えたものであった。2,504頁に及ぶこの辞典は国語辞典を凌ぐ語いを収



め、「当時ほとんど唯一の信頼できる和英辞典であった」<sup>(10)</sup>のである。武信はこれを殆ど独力で作成した。この辞書は昭和6年に至って、『新和英大辞典』と成長するのだが、その改訂の主幹をつとめたのも武信であった。

その『新和英大辞典』の刊行に先立って、昭和5年4月、海外に一歩も足を踏み出だすことのなかった英語の達人武信由太郎は没したのである。

注(1) 『日本の英学100年』別巻(研究社刊, 1968年) p.166.

(2) 『日本の英学100年』明治編, pp. 431, 432.

(3) *ibid.*, p.482.

(4) *ibid.*

(5) *ibid.*

(6) 「早稲田大学第23回報告」, 前記入交教授の早稲田商学 234・235号所載論文による。*ibid.*, pp. 34, 35.

(7) *ibid.*, p.379.

(8) 『日本の英学100年』明治編, p.489.

(9) *ibid.*, 大正編, pp.222~234.

(10) 羽柴正市「武信『和英』」*ibid.*, pp.234~242.

#### Ⅳ

##### 勝俣銓吉郎

勝俣銓吉郎(本名は銓吉)は明治39年4月武信由太郎の紹介で早稲田大学商科に講師となり、昭和18年3月停年退職、4月に名誉教授となるまで38年間英語商用文と英語を教えた。<sup>(1)</sup>

勝俣銓吉郎は明治5年、箱根芦の湯の旅館伊勢屋の長男として生れ、小学校の卒業も待たず、家計を助けるため14歳で横浜郵便局に勤めた。勤務の余暇に夜学やミッション・スクールに通って英語を学んだ。明治29年英国から来た観光客 Cholmeley の知己を受けて学資を贈られ、上京して国民英学会に学び、岡倉由三郎等の薫陶を受けた。明治30年ジャパン・タイムズに入社、4年間勤務した。ここで勝俣は、自分の「母校はジャパン・タイムズ」だと思ふほどの勉強をした。時の編集長は、武信由太郎であって、勝俣は武信とともに『英語青年』を創刊したのである。明治34年には、健康上の理由と、研究の時間を作

るため、武信の世話で、東京府立第4中学の先生になったが、35年には三井鉱山の団琢磨専務理事の英文秘書となった。ここで勝俣は実務英語を修業する。明治39年4月に、読書研究に専念するため、武信由太郎の紹介で早大商学部の講師となった。「何か英語の力を示すものを出世」ということだったので「新聞記事の英訳と『万朝報』に出ていた『俚謡正調』（都々逸）の英訳と」を出し、それがパスして商学部の英作文を担当することになった勝俣は、早大講師に就任以来、商学部の外に教育学部や文学部などの教授をも兼務、歴任し、ある時期には付属の専門部、高等学院などにも出講し、またある時は高等師範部長として教育行政の一部を担当したこともあった。こうして昭和18年3月31日、70歳の停年で退職。翌4月には商学部の推すところによって名誉教授となった。この間に大正2年 Japan Tourist Bureau（現在の Japan Travel Bureau で日本交通公社）の設立と同時にその嘱託となって機関誌 “*The Tourist*” の編集と記事の執筆に当たった。戦後は、終戦連絡中央事務局嘱託、衆議院臨時翻訳事務嘱託、法務府事務官を歴任、立正大学文学部教授、富士短期大学長、同理事に就任、昭和32年にはわが国英学者として初めての「紫綬褒章」を受けた。逝去の昭和34年9月22日付けで正6位勲5等に叙せられ双光旭日章を授けられた。

勝俣銓吉郎はその生涯におよそ30冊の著書を書いたが、そのうち辞典及び辞典類似のものは8冊に及ぶ。主なものを年代順に挙げると次の通りである。明治36年ハワード・スワンと共著の『応用英和新辞典』（*The Thesaurus of Everyday English*）ABC社発行。明治42年神田乃武、南日恒太郎共編『英和雙解熟語大辞典』、これは発案と材料蒐集とも最初の3年間は勝俣がやった。明治44年『英和例解要語大辞典』（上巻A—L）（*A Dictionary of English Particles and Other Grammatically Important Words*）有朋堂。昭和14年『英和活用大辞典』研究社。昭和29年『新和英大辞典』研究社。昭和33年『新英和活用大辞典』研究社。

その代表的なものは『英和活用大辞典』及び、『新英和活用大辞典』である。「勝俣先生は早稲田大学の名教授としてよりも字引の勝俣先生、特に『英和活用大辞典』の編者として永くわが国の英語史上に残るであろうほどの功労者で

ある。』<sup>(2)</sup>「わが国で明治以来編纂された英語に関する特殊辞典のうち、真に独創の名に値するのは、勝俣銓吉郎編『新英和活用大辞典』(*Kenkyusha's New Dictionary of English Collocations* 昭和33年1525頁)であろう。これこそ英語活動態(English in Action)をコロケーションのうちに展示しようと試みたユニークな辞典である。氏はかつて神田・南日共編『英和雙解熟語大辞典』明治42年(1909年)においてその萌芽ともいうべき、構造による語の検出法(たとえば Verb+Preposition の構造は「動詞」によって検出する)を立案されたのであった。このコロケーションの考えを具体化し20万におよぶ用例を50年がかりで平易な普通の英語から蒐集し、ここに一巻の辞典をなした。ライフ・ワークというべきである。』<sup>(3)</sup>実際には、勝俣がその有名な「“note habit”」によって集めた語群は33歳の時から約50年間に、カードにして約100万枚、『活用辞典』に使ったものだけでも旧版が約50万、新版が15, 6万(その中約3割は不相当として除外)である。その他『英和大辞典』(新版)に使用したもの、さらに先生が最後まで手がけておられた『英和要語辞典』(仮称)の材料を加えれば全く驚くべき数になる。仮に1日に50枚ずつカードを作製したとしても、50年間で80万そこそこではないか、全く超人的事業である。』<sup>(4)</sup>いま勝俣の『新英和活用大辞典』は、英文を書く者の座右の書となっている。

勝俣の収集癖は更に日本の英学史資料に及んだ。勝海舟の手写になるオランダ語辞書や、写本の『薩摩辞書』を始めとする稀覯書の数々は、いま早稲田大学図書館に勝俣文庫として保管されているが、後世のために勝俣が残した貴重な資料であって、彼はこのため生涯を清貧に甘んじたのである。

ジャパン・タイムズ以後の勝俣は武信由太郎の歩んだ道を、勝俣独自のしかたで歩んだ。二人とも英文ジャーナリスト出身であり、二人とも早稲田の商学部に教鞭を取り、二人とも英文を書くための辞書を編纂し(勝俣は武信の『大和英辞典』の改訂に際しても主幹として編集の任に当たった)、二人とも英文家を以て任じた。勝俣はそのペン・ネームを Eisaku Waseda (早稲田英作)と名乗った程である。また二人とも英語を以て国に報ずるの信念に徹していた。そして、我が国有数の英学者として、英米にも類を見ないような名辞書を、殆

ど正規の教育を受けずに完成した勝俣は、先輩武信と同じく、遂に外国の地を踏むことなく一生を終ったのである。

注(1) 以下略歴は、主として上井磯吉「英学者の生涯」『英語青年』1959年12月、Vol. CV.—No.12(勝俣銓吉郎翁追悼号)による。

(2) *ibid.*, p.33.

(3) 梶井迪夫「各種専門辞書」『日本の英語100年』昭和編, p.307.

(4) 佐藤佐市「辞書編集者の生活」『英語青年』Vol. CV.—No.12, p.34.

## V

### 伊地知純正

武信にはもう一人弟子がいた。早稲田大学商科第一期生の伊地知純正である。勝俣銓吉郎が、いずれかと言えば子分的関係であったのに比し、伊地知は早大商科入学以後、私的にも、正規の教育面でも、弟子であった。自らも『英文修業55年』において「武信門下生となる」という項目を設けている。また勝俣は伊地知在学中に商科の教員となったのだが、伊地知の方では兄弟子という捉え方をしていたらしく、武信については必ず「先生」という敬称を付けているが、勝俣のことは、「老兄」もしくは「大兄」と呼んでいる。

伊地知は<sup>(1)</sup>明治17年宮崎県加久藤村に生れた。宮崎中学に学んでいるうちに、漢文の時代が過ぎて英文の時代が到来すると考え、「自分の意見は総て英文で発表する」と決意した。武信と勝俣が明治31年に創刊した『英語青年』は、その発刊の意図どおりに、翌明治32年には中学3年生の伊地知に格好の刺戟を与えたのである。以後伊地知は「日本文化を海外に輸出する野心」を持って、「英文修業」に一生を献げるのである。中学時代の英文修業は読書と英文日記であったが、英文日記の方は、後に、大正7年『僕の英文日記』として、原文に評注、Revised version を付して研究社から発行され、英作文の良い参考書として版を重ねた。

伊地知は、明治36年9月早稲田大学の商科高等予科に編入試験を受けて入学した。伊地知は学生に「読めます、書けます、話せますの三拍子揃った英語」を学ぶように教えるのが常であったが、これは彼が商科在学中に高田早苗学長

から受けた教訓であった。当時の商科は本科でも英語の時間が7, 8時間あり、専門学科も英文テキストが多かったから、英文家志望の伊地知は「いい気持ちで」授業に出たのである。「英語専門の学科では、英語のための英語を余り重視する傾向がある」ので、「商科に入ったお蔭で」「知識を習得する一つのtool」としての英語を「内容に注意を払」いながら学ぶことができた、後年伊地知は述懐している。

明治37年に本科生になった伊地知は、第一期の同級生と語らって、実力のない商用英文の先生を、質問攻めにするという「正々堂々」の方法で、二人まで「自主的」にやめて貰っている。その後に来たのが武信由太郎であって、明治38年4月のことであった。武信にも「正々堂々」の質問攻め（主として武信の日本語が聞き取り難いものであったためらしい）が行なわれたが、数回にして、「こん度の先生の英文は“本物”だということに」「衆議一決した」。やがて、伊地知は新聞記者を志望するようになり、ジャパン・タイムズ出身の武信を頻繁に訪れて「木戸御免」になった。伊地知のペン・ネームの一つにE.D.T.というのがあるが、これは、口下手な武信と弟子の間に、会話に替って取り交わされた書簡に用いられて固定したものである。

伊地知は明治39年に商科を卒業し41年2月ジャパン・タイムズに入社した。

伊地知は学生時代に早稲田大学英語会を創立している。初代の会長は大隈信常で、大隈の英国遊学中臨時に鳩山和夫学長が会長を兼務した。女子学生のない当時のことから、伊地知は『ベニスの商人』のポーシャを小柄で紅顔の女形として演じたりして得意であった。この英語会の関係で、伊地知は大隈重信に会って、日露戦争直後の海外発展論と英語必要論を説かれ、いよいよ英語で身を立てる決心を固めた。

後に至って、伊地知は「大隈の『英語をやらんといかんぞ』の語をあまり正直に受入れて、英語をやったため、出世もせず、金も出来ず、損ばかりしている。大隈の私に対する罪大なり、というべし」とユーモアをまじえて述懐しているが、“*The Life of Count Okuma*”（早稲田大学出版部）一巻を英文で著わして、その恩に報いた。

伊地知が恩師と呼ぶ一人の人物はダニエル・ジョーンズである。明治44年から大正2年まで英仏米に留学した伊地知は、滞英京1年半の間にジョーンズについて英・仏語の音声学を学んだ。けだし、ジョーンズにも初期の学生の一人であった。この留学のとき帰路米国に立ち寄り、しばらく“*The Oriental Review*”の編輯に当たった。帰国後“*The Far East*”誌上に連載された“*My London Year*”と“*My New York Life*”は大正3年と同5年にそれぞれ研究社から出版され内外人の間に読者を得て、版を重ねた。エッセー形式のうちに盛られた文明批評的な精神が興味を呼んだためであった。伊地知は両書によって、ラフカディオ・ハーンやエドウィン・アーノルドが日本の文化を観察したのと同じように英米の文化を観察したのであった。

教員としての伊地知の履歴は、この第一回の留学前にさかのぼる。伊地知は明治42年から講師として早稲田の附属学校で英語を教えていた。しかし、専任になったのは大正3年で、教授になったのが大正4年である。これでジャーナリストとして出発した伊地知の英文稼業はエッセイストと教師のそれに変わったのである。『英文修業55年』には、その当時の高田学長との面談の様子が書かれていて、伊地知が英文家としての仕事に掣肘を受けるなら専任にならなくても良いという決意を披瀝するあたり面目躍如としている。学部における伊地知の最初の講義は音声学であったという。

“*England Revisited*”（大正10年、研究社）と“*America Revisited*”（大正11年、研究社）のきっかけとなった第2回の留学は大正7年から1年間にわたるものであった。またこの大正7年には『倫敦名所図会』（研究社）が出ている。“*My Third Visit to London*”（昭和8年、研究社）が出版されたのは昭和7年の6ヶ月にわたる欧米視察の成果であって、この視察旅行は、また、伊地知が商業英語に関する活動を開始するきっかけともなった。すなわち翌8年7月には文部省の後援を得て、中村賢次郎等と共に商業英語に関する学会の設立運動を開始し、同年11月には、現在の日本商業英語学会の前身である商業英語研究会が創立されたのである。伊地知は既に大正13年1月に“*Business English*”を研究社から出版し版を重ねていたが、研究会設立とともに、新し

い商業英語のあり方を追及し、普及する任務を自ら負うたのである。

伊地知の著作のうち、もっとも大部なのは“*Life of Marquis Shigenobu Okuma*”（昭和15年、早稲田大学出版部）である。伊地知は自ら文明批評家をもって任じ、その面における彼の力量は、この書を単なる大隈侯の伝記に終らせることなく、一人の偉人の生涯を通じて見た維新史とし、その故に、欧米における日本近代史研究者にとって必要欠くべからざる参考書となっているのである。

第2次大戦は、伊地知の英文による著作活動を極限にまで抑圧し、最後には、故郷に引き上げることさえ止むなくされたのであったが、終戦とともに大学と読者は伊地知の復帰を必要とした。先ず伊地知は、新制大学への移行命令のために、次第に増加する米軍司令部との接触等に当るために設けられた早稲田大学渉外部の長に任ぜられ（昭和20年）、ついで商学部長になった。昭和24年には4度目の海外視察に赴き、帰国して早稲田大学理事の要職に就任し、新制大学の発足に尽力した。「従来のいわば資格試験の制度とも言うべき教育のありかたを、Daily Trainingとしての学生の指導を重視することによって、改善しよう」とするこの制度改編は容易なことではなかった。外観のみを適応させ、内実は旧態のままたらしめることも容易であったが、伊地知は可能な限り妥協を排して、単位制の本質を具現し、General Educationの重視によって民主的な市民社会のリーダーを養成し、Higher Professional Educationは新制の大学院で完成するのだという3つの目標に向って、まさに徹底的な改革を行なおうとした。商学部は、この努力によって、学内においても、他学にくらべても、極めてユニークな主張と制度を持つに至ったのである。これらの要職にあった60歳から70歳に至る間の伊地知は公務の折節に英文家としての自分を見忘れることがなかった。読者は、ニッポン・タイムズ（現在ジャパン・タイムズ）紙上に、そして早稲田大学の学生英字紙ワセダ・ガーディアン（1936年日米学生会議の折創立されたこのユニークな新聞の戦後における復刊に伊地知純正は大きな貢献をし、その会長であった）紙上に、その戦後風俗評を見出して、伊地知の健在を知った。それらは伊地知の古稀を記念して、美しい和装の

“*When Two Cultures Meet*”（昭和30年，研究社）となって出版された。時を同じくして，日本文による自伝的エッセー『英文修業55年』（昭和31年，研究社）が発行されたが，これは日本人として，英文に独自のスタイルを作り上げた伊地知純正の回顧録であり，且つ後進への指標でもある。『英語青年』誌上に連載された昭和29年～30年の間に幾多の読者が多大の感銘をもってこれを読んだものである。

伊地知純正は教育者として46年の長きにわたって早稲田の教壇に立ち，多数の教え子を持ったが，なお多数の未知の弟子がいることを忘れてはなるまい。伊地知は長きにわたって『英語青年』誌上で英作文の指導を行ない，その指導を受けた人々は学生からプロフェッショナルな英文ライターに至るまで多数に及ぶのである。

戦後になって商業英語の分野における伊地知の活動も活発であった。「大学における商業英語教育の在り方」に関する意見書を，日本商業英語学会の名において文部省に提出したのは昭和25年のことであった。おなじ頃“*Practical Business English*”（昭和24年，稲門堂）が出版され，ついで29年の停年退職の後にも“*College Business Writing*”（昭和33年9月，南雲堂）が発行された。さらに念願であった“*Business English Dictionary*”が編纂途上であったが，病気のため中断の止むなきに至った。

退職後，大学はその功に報いるため，名誉教授の称号を贈った。そして伊地知はかねてからの念願であったソローの隠遁生活を実行した。そのために，かねてから求めてあった西荻窪の善福寺の土地に，思うままの設計になる書斎を建てさえたのであった。「ソローは2年半だが，自分は少なくとも5年は続ける」と言っていた伊地知は，とうとう7年間も独居生活を楽しんだ。独居生活は自動車事故がもとで解消になったが，2年後，昭和39年8月11日病状急転して逝去した。享年80歳。

注(1) 略歴は伊地知純正「英文修業55年」『英語青年』Vol. C. —No. 11 (1954年11月号) ～Vol. CII. —No. 2 (1956年2月号) および，伊東克巳「伊地知純正先生の生涯」『英語青年』Vol. CX. —No. 11 (1964年11月号——伊地知純正先生追悼号)による。「」内の引用は「英文修業55年」から。



## Ⅶ

## む す び

商学部草創期の英語教育を担当した人たちについて、述べねばならぬ名も功績も多いなかで、以上の三人の先達は、英語を書くことによって日本を外国に知らしめようと努力し、これに一生をかけたことで共通な特徴がある。そして、現代においても、世界の共通語としての英語を **Communication** の道具として駆使するために学ばなければならないという状況は、何ら変わっていない。いや、もっと重要で深刻な問題になっていると言うべきだろう。あえて三人の努力のあとを振り返り、奮励勉強の資とするものである。

部史としては、更に、次の時代を担った人々、名を挙げれば、戦中、南海に没した野口勇、新制大学の制度確立に努力した中島正信などの伊地知の弟子の時代に入るべきだが、与えられた紙数が尽きたので、また折を見て稿をつぎたいと考えている。